

序

運動器疾患に対する理学療法を行う際に最も大事なことは“どこを治すか？”であると確信をもって患者に向き合っている。“どこ？”に差し迫るには、解剖学が重要で、対象となる構造を確認できれば、それがどのように機能するかを考える。機能解剖学に基づいた理学療法介入とは、運動器疾患の病態をふまえた理学療法であり、運動器疾患の理学療法の『王道』になる。

私たちにとって、これまで一貫して“どう治すか？”は重要ではない。理学療法には様々な介入方法が考えられてきている。『これをやれば、〇〇の患者がすべて治る！』という治療方法があれば、ほとんど理学療法士がその手段を覚えるであろう。しかし、残念ながらそういった方法があるわけではない。無論、本書に記載している徒手療法や運動療法がそういった類のものであるとは微塵も思っていない。『もっと良い方法があるかもしれない』、本書の全著者がそう感じながら、迷いながら執筆してきた。では、なぜそんな想いのなか本書を上梓したのか。

本書は以下のような理学療法士や学生に、運動療法のヒントを得てほしいと考えた。

- ・患者の治療に自信の持てない若い理学療法士
- ・先輩の治療を見学する機会の少ない理学療法士
- ・より良い理学療法を立案したいと考えている理学療法士
- ・初めて患者の治療プログラムを立案することに不安な学生

私達が若い理学療法士だったころは先輩の治療を横目で見たり、上手いかない症例を先輩が診てくれたりした。そのなかで、実際の運動療法を真似して、ここを治すにはこうすればいいという“How to”の積み上げも行ってきた。しかし、今の若い理学療法士や学生を取り巻く環境は変わり、ゆっくりと理学療法を見学する機会もなければ、自分の理学療法を見てもらう機会も少ない。理学療法の領域が増えれば、自然に学ぶべきことは増える。つまり、先輩たちの理学療法の“How to”の技術習得を効率よく進める必要がある。

そこで、難しい解説や解剖学的解説をはできるだけピンポイントにして、必ず見開き2頁で1つの運動療法の解説を終えるようにした。さらにテクニック上のポイントや、ありがちな失敗例は写真を用いて説明した。ぜひ、今日うまくできなかったと思った治療があれば、その治療が載っている頁を開いてほしい。ポイントを整理して、翌日の臨床に活かすことを願っている。そして、一人でも多くの患者を救う手立てになってくれれば幸いである。

本書は株式会社 羊土社の鈴木美奈子さんの強い後押しがあって企画が実現しました。また横内和葉さんは見やすいレイアウトや表現を細部にわたって気にかけてくれました。お二人には心から深謝いたします。最後に、父親の休みや帰りを心待ちにしてくれる圭一郎と蒼士、二人の子育てに奮闘してくれる妻、美知に感謝を込めて。

2022年2月

森ノ宮医療大学保健医療学部理学療法学科 教授

工藤慎太郎